臨床青年心理学研究（V）

——思春期登校拒否と働くことの意義をめぐって——

田畑　治　伊藤義美[1)]

I　はじめに

思春期（ないし青年期，以下思春期と統一して記述する）の登校拒否に悩む本人またはそのような子どもの親に対して，臨床的援助としてカウンセリングを行っていく際，彼らが挫折し，自己内閉あるいは“籠るということ”をすることの積極的意義については，前々報（田畑ら，1979）でかなり詳しく論じてきたとおりである。

ところで，かかる思春期登校拒否に悩む本人が，その臨床的援助を受けていく過程で，一つの大きな転機となる現象が生じることを発見することがある。それらのひとつはカウンセリング援助をしていく途上で，彼らのある者は，登校はしないが，そのための何らかの前駆的な行動として，われわれが本論文で展開したい働くということを開始することである。

もちろん，従来から，たとえば小泉ら（1972），光岡（1977）によって，中・高校生年代の登校拒否のカウンセリングでは，その再登校や社会復帰の過程で必ずといってよいくらいアルバイトが登場することが多かったことは，指摘されてきている。つまりこれらの論者は，登校拒否中・高校生に対して，アルバイトは，①それまでの隔絶された社会に本人たちが関係をもっていく際に，学校よりもより近づきやすい場所であり，②閉じこもりでうっ積するエネルギー発散の恰好の機会であり，③何よりも自己労働で金銭という実際の報酬を得る一方，④社会の一員として参加することでの心理的安定感が得られることの意味をもつことを指摘している。

しかし，もう少し微視的に，あるいは巨視的に問いかけてみると，つぎのようなことが浮き彫りにされはしないであろうか。

これら思春期登校拒否に陥ったものが，対人関係の距離を保つための一つの絶好の場として，働くことあるいはアルバイトの場を活用しているのではないか，

これら思春期登校拒否に陥ったものが，働くことあるいはアルバイトをするというのは，大都市，中都市周辺に特有なことではないか，

これら思春期登校拒否に陥ったものは，基本的に社会的体験学習を欠落させたり，その反対に渇望しているのではないか，などがつぎつぎと問いとして浮かび上ってくる。

本稿では，以上にあげたような問いにも答えるべく，筆者らの自験例5例にもとづいて，臨床青年心理学的考察を加えようとすることを目的とする。（田畑・伊藤）

II　症　例

1. 症例Aの概要[注1)]

H.T.　男子　受理面接時年齢　14歳9カ月。中学3年。

1）主訴：登校拒否，ＵＦＯに夢中になっている《母親の供述》。

2）家族構成：父親（55歳），母親（48歳），兄（17歳），本人の4人家族である。

3）登校拒否の発症と経過《以下母親のみの来談のため，主に母親の供述によるものである》：中学1年の4月中旬から，学校へ行かなくなる。その理由になるきっかけは，学校の友達が弁当のオカズに「ピーマンを食う奴は下族だ」といったことである。それ以降は，新学期や新学年の切れ目に一週間程度行くことがあるが，けっきょく馴じめないままに不登校が続く。「明日は必らず(学校に)行く」と言いながらも行けないので，そのことを母親に謝るなどして本人は苦しむ。中学1年の5月頃から，ＵＦＯの写真撮影に夢中になり始め，また年末年始頃には「地球が破滅に陥る」という世界没落体験や

1）名古屋大学教養部

注1）本症例は，田畑ら（1979）「臨床青年心理学研究（Ⅲ）－男子症例に関する考察」でとりあげた第3症例と同一である。働くこと，アルバイトの内容および進路の選択との関連事項を主にして再記述する。

「宇宙からテレパシーを送ってくる」という幻聴をも体験している。ＵＦＯに夢中であることは，その後もずっと続き，某新興宗教の集会場で一席ぶって，家に帰ってぶっ倒れるほど疲れることもあった。

中学３年の８月に家庭教師を依頼し，英語と数学を勉強しはじめるが，いっこうに登校することができない本人に業を煮やし，母親が来談したのはその年の10月である。

４）カウンセリングの過程：本人は来談しないので，母親との面接のみを12回（電話による相談も含む)行う。初期には，母親は息子との問題に“もつれた糸”のようにがんじがらめになっていた。しかしカウンセリングの援助を通して，母親はこうした密着関係から，子どもとの間に心理的距離をとることができるようになり，母親は母親自身の生き方を見い出すことができるようになった。そして終期には，子どもは中学を卒業させてもらい，中学浪人をすることになり，母親も「今日からあなたが自分でやりなさい」と，ひとりの人格としての息子の独立独歩を認め，かつ促すことができるようになった。

５）働くこと・アルバイトの開始とその内容：本人がほとんど中学を不登校であったにもかかわらず，卒業させてもらい，中学浪人となった頃から，特に７月頃からこれではだめだと気づきはじめ，勉強しはじめた。また８月頃から，母親に内緒で，マラソンをやっていると称して，夕刊配達のアルバイトを始める。《父親がこっそり母親に伝えたことで判明する。》新聞販売店でもらったアルバイト料を，「ハイ，これだよ」と母親に見せることで得意気になった。新聞販売店の人に「しっかりしている。一日も休まない」と言われ，他人の信頼を得てますます本人は元気づけられる。

翌年の３月から，朝刊の配達も始める。自分でちゃんと朝４時20分に起床し，６時30分には配達し終えて帰宅するようになる。４月からは集金も任せられて，本人は家で集金の際の苦労談もやるようになる。本人は「３年間で100万円貯める」「ものすごく精密なものを買う」と母親にもらしているという。

６）進路の選択：中学卒業直後は，何もすることがなく，家でゴロゴロしていた。しかしその年の７月頃から本人自身これではダメだと気づき始め，勉強をしはじめた。そして８月以降は「円盤は円盤，高校は高校」と使い分けができるようになった。そして翌年の２月に，高校進学を決意し，頑張って勉強した。兄が卒業した某私立高校に合格し，４月から通学しだした。最初は緊張していたが，１カ月も経たないうちに慣れ，友だちもできて自信がついてきた。高校での教師の受けも大変よく，２学期が終ったらクラス委員長に任命したいとも言われるようになる。新聞配達と高校生活を両立させ，元気にすごしている。

本人自身も「僕は３年間寝ちゃったから，あとの３年間は倍にして返さなくちゃ」と頑張っている。また入学時に新聞配達店主に，入学祝として万年筆をもらっている。新聞配達をやってみて，「どうしてあんな些細なことに神経をとがらせていたのか不思議だ」とも語っている。

（田　畑）

2. 症例Ｂの概要

Ｔ．Ｉ．　男子　受理面接時年齢　15歳６カ月。高校１年。

１）主訴：登校拒否の子どもに，学校あて診断書を発行してほしい《父親の訴え》。

２）家族構成：父親(47歳)，母親(36歳)，本人の３人家族である。両親とも九州出身で，父親は炭坑離職者である。母親は，家に居ても面白くないといって，来談時には，行方不明であった。後に帰宅している。

３）登校拒否の発症と経過：某県立工業高校に入学した１年の６月半ばから，本人が「普通科の方が良かった」といって，学校へ行かなくなる。またクラブとして加わっていたラグビー部の練習がきついということももらしている。《後に，本人は「中学校とちがって，自由奔放な雰囲気がかえって馴じめず，そのなかで自分の責任に負担を感じていた」と語っている。》

９月に入り，２日ほど登校したが，９月下旬から父親に対して，「休学したい」と自分から言いだす。筆者らの前には，休学のための『診断書』を求めて，父・子で来談する。

４）カウンセリングの過程：父親と本人とに併行で，２回の面接が行われた。最初の面接時には，本人の方はすでに休学のための『診断書』を発行してもらうものと決め込んでいた。父親には，来談の経緯をきき，援助の見込みがあれば，継続してカウンセリングを行うことを伝える。しかし面接後，父・子で同席し，今後の方針を話し合うが，本人の「休学の意志」は固く，「来年の３月まで休学し，それからどうするか決めたい」との返事がかえってくる。

筆者らは，本人の意向を尊重し，一度高校の担任教師にも問い合わせて，けっきょく第３者の所見として『心理学的相談面接報告書』を高校側に送付した。

翌年３月14日に，約束どおり，再会の申し出があり，その時点での様子を父親と本人の同席で伺った。そして再度『報告書』を発行し，復学が好ましいことを，高校宛に送った。

５）働くこと・アルバイトの開始とその内容：初回来談時に先だつ一週間前（９月中旬）から，すでに本人は

新聞配達のアルバイトを始めていることが判明した。朝刊と夕刊の両方を配達している。朝刊の配達は，朝5時に起きることになるので，最初の1カ月は父親が起こしてやったが，その後は目覚し時計だけで自主的に起きた。このようにして，毎日50軒ばかりの新聞配達の辛さと苦しさ　一特に冬場は辛かった一　を乗り越えてやり抜いたことによって，自分の体力と気力に自信をつけた。本人は更にその年の12月から，往復4㎞のランニング《ジョギング》を始めている。自分でも「本当によく頑張ったと思う」と述懐している。

6）進路の選択：休学許可された年の正月明けから，学校へ行く気になってきた。再度来談したとき（3月）には，それまで肥満体で，どことなく幼ない表情であった本人が，身体つきもガッシリし，ひとまわりたくましくなってきたという印象を受ける。表情もひきしまり，きりっとした感じをもった。

復学した時の本人の様子を，後に生徒指導の教師はつぎのように電話してきている。「復学したことをちゃんと挨拶しに来た。授業後も，授業内容について積極的に質問してきたりして，休学したことをちっとも気にしたり，いじけたりしていない」「明るい子どもになった」と。人が変ったように明るくなったので，学校の教師同僚も驚いているということであった。

《なお，この父親は再来時に，母親が帰宅したこと，家庭で食事等の面倒は女親でないとダメであること，自分は酒好きで，大の西鉄ライオンズのファンであったことなど，胸のうちを明かして行った。》

（伊藤・田畑）

3. 症例Cの概要

E.A.　男子　受理面接時年齢　16歳3カ月。高校1年。

1）主訴：2学期より次男が登校しない。家庭内での指導について《母親のみの来談による訴え》。

2）家族構成：祖母(77歳)，父親(49歳)，母親(48歳)，兄(19歳)，本人の5人家族である。

3）登校拒否の発症と経過：某県立工業高校に入学した5月初旬に，登校をしぶりだす。頭痛，腹痛，腰痛などの身体症状を訴え，1学期間は，ある時は欠席し，ある時は遅刻や早退を繰り返えしながら登校を続ける。

しかし2学期からは，9月に10日くらい登校するが，それ以後プッツリと不登校に陥ってしまう。そして昼夜逆転の無為な生活を送る日々が続き，イライラして壁に物を投げつけたり，母親に対しても攻撃的な言動が見られ出した。家族が本人の顔色をうかがい，一挙一動に一喜一憂する状態になってくる。外出は，本屋に行くか，大好きなラグビーの試合を観戦するために出かけていく程度である。

4）カウンセリングの過程：来談は，本人自身ができないので，母親のみとのカウンセリングを開始した。生徒指導の教師が，家庭訪問をしたりして，すでに本人自身へのアプローチをしており，本人はその生徒指導教師に任せて学校側とわれわれとで協同的援助をはかることになった。

母親とは，1年8カ月の間に，23回のカウンセリング・セッションをもって終結した。初めは，週一回の割合でカウンセリングを開始したが，本人の状態像の変化と母親の内面的成長に応じて，次第に隔週に1回，1カ月に1回というふうに変っていった。

子どもが可愛いいあまりに，親は本人を暗々裡に期待する型にはめようとして，子どもの自発性の芽を摘んできたことに母親自身が気づき，それまでの密着的・侵入的な関係から，本人の内的世界を尊重し，一定の心理的距離を置いて対応できるようになっていった。それにともなって，家族全体が落ち着きを取り戻し，本人は家族との会話，家庭の手伝い，自転車乗りの練習，早朝マラソン，読書，アルバイト等，対人関係や生活意欲・行動において積極的に動けるようになっていった。

5）働くこと・アルバイトの開始とその内容：翌年の4月には再び休学措置になったが，5月頃からなにかアルバイトをやりたいと口にしはじめ，7月からは看板・塗装業のアルバイトに出ることになった。

教師や親が手配し，準備したアルバイトよりも，結果的に自分で捜して話しをつけてきたアルバイトに出たのである。自転車で15分かかる職場へ行き，朝8時30分から夕方5時30分まで看板の塗装や市街の看板上げを手伝った。いつまで続くかという親の心配をよそに，週6日休まずに出て，かなり危険な力仕事もこなし，身体のあちこちにペンキをつけて帰ってきた。もちろん，母親が心をこめてつくった弁当箱はカラッポにして持ち帰っていた。こうして真夏でも，雨の日でも熱心に職場に通い，進路問題が現われる11月まで，アルバイトを続けていった。

6）進路の選択：看板・塗装業のアルバイトを11月で止めて，一応再受験を目指して，受験勉強を始めたが，再受験の困難さを知るにつれて，あとは復学するか夜学へ転学するかの選択になった。そして遂には自分がやって行けそうな自信と見通しがある夜間高校への入学を主体的に選びとることになった。こうして夜間高校への馴じみ込みもスムースにゆき，明るく元気に高校生活を送っている。

さらに注目されるのは，夜学で必要な諸経費は，自分

が看板・塗装業のアルバイトでかせいだ賃金でまかなっており，親から一銭も援助を受けていないことである。今後も，本人は昼間の仕事先を探して，自分が稼いだお金で卒業したいと語っている。　（伊　藤）

4. 症例Dの概要[注2)]

M.M.　男子　受理面接時年齢　16歳11カ月。高校1年中退。

1）主訴：子どもの問題　―現在高校1年で退学し，家でブラブラしている。今後の本人の指導をお願いしたい。

2）家族構成：父親(53歳)，母親(43歳)，本人，弟(14歳）の4人家族である。

3）登校拒否の発症と経過：某私立高校1年時の11月に，「学校をやめたい」と言いだす。父親の話によるとその理由は，①先生の態度が気に入らない，②校則が厳しい，③友人がいじめる，の3つであった。学校に行かなくなり，家財道具を壊したり，母親や弟に家庭内で暴力をふるうなどの，八ツ当り的行動，アクティング・アウト的な行動をとり出す。担任や両親が，本人に休学をすすめるが，本人はそれを嫌がり，ますます乱暴になったので，翌年1月16日に退学することになった。

その後，家でブラブラしているので，今後の指導をお願いしたい，ということで両親に伴われて7月下旬に来談した。

4）カウンセリングの過程：本人とは9カ月にわたって10回の面接を行い，両親とは11カ月にわたって15回の面接を行った。

本人との面接では，復学や再受験の意志がまったくないことが明確化され，働くということをめぐって半人前ながらも，心理社会的・経済的にも，分離・独立の過程を歩み出していった。

両親は，本人の問題はもちろん，弟や家族全体の問題に取り組み，特に父親は自分自身が「子どもの手本になれなかった」という気づきを通して，それまでバラバラで苦悩に満ちた家族を平安に導き，受容的で協調的な雰囲気をつくり出す努力をし，一応の成果を得ることができた。

5）働くこと・アルバイトの開始とその内容：本人はカウンセリングの過程で，いつまでもフラフラしておれないので働きたいと表明していたが，実際にはなかなか行動がおこせなかった。しかし，働きたい気持が強くなってから，それまでの不規則な生活が直されてきた。

10月から，「身体慣らし」ということで，蒲団乾燥業の仕事に週5日出るようになる。内容は，蒲団の運搬と自動車運転の助手である。仕事場まで，自転車で30分かかり，「仕事前に足が疲れてしまう」と本人は嘆きながらも，職場の仲間，親，友だちに信用を得るために，意地にでも「我がままは言えない」と頑張り通した。仕事を終えて帰る時の「ああー，やっと終わった」という感じがとてもいいと語った。こうして職場の厳しさ，金もうけの辛さを身にしみて感じるとともに，職場での協同的，受容的な人間関係を経験したのである。

6）進路の選択：会社が忙しい時期には休日を返上して仕事に出ていた。だが，一年半くらいで蒲団乾燥業をやめてから，家を離れて関西の某市で，左官職人の見習いとして住込みで働くことになった。親方は厳しい人であるが，反面でとても温い思いやりのある人とかで，本人も喰らいついていっているという。将来，左官職人としての技能を身につけ，その道で専業として生活していくつもりであることを，フォロー・アップ時に語っていた。　（伊藤・田畑）

5. 症例Eの概要

H.O.　男子　受理面接時年齢　17歳3カ月。高校2年休学中。

1）主訴：登校拒否の現在，親も子も悪い生活のリズムが慣れになってしまって，このままではいつになったら立ち戻れるかが心配である。カウンセラー《→カウンセリング》を早く受けてほしい。《母親による訴え》。

2）家族構成：父親(53歳)，母親(45歳)，姉(20歳)，本人の4人家族である。

3）登校拒否の発症と経過：某県立高校1年の3学期（2月）に，猛烈に試験勉強をして，「英語でトップになる」と意気込んでいた。そしてその結果，学年で2番となり，「まだ上の奴がいる。あれだけやったのに」と嘆いていた。それからカゼを引き，5日間休んだのをきっかけに登校時間もギリギリに家を出るようになり，3月からプッツリと登校しなくなった。そして離れの2階の自室に内側から鍵をかい，ずっと引き籠ってしまった。家族の前にも全然姿を見せることなく，こっそりと人目を避けてなされる深夜の入浴，下着の取り替え，一日一食の運ばれる食事の摂取以外には，本人の様子を伺い知れるものは何もなかった。昼夜逆転の生活は1年半以上にも及んでいった。

こうして1年8カ月余りの“籠り”を経て，翌年の11月下旬頃には自発的に自室から出てきて，両親と一緒に

注2）本症例は，田畑ら（1978）「登校拒否・家庭内暴力・働くということ」でとりあげた症例である。先の症例Aと同様，働くこと，アルバイトの内容および進路選択との関連事項を主にして，再記述する。

食事をするようになる。姉は，大学所在地に下宿しており別居である。

4）カウンセリングの過程：本人が休学中の高校2年の11月から母親のみとのカウンセリングを開始し，隔週に一度の割合いで，1年1カ月の間に27回のカウンセリング・セッションを持った。その後本人自らが母親に伴われて突然来室する。そしてカウンセラーの積極的な誘いに促がされて，週一回のカウンセリングに単身で通うようになった。本人とは13回（4カ月）継続し，終結した。

こうして本人は，それまで自信を喪失し，他人との接触も煩わしいと感じていたところから，自信を回復し，他人とも積極的に接触し，自己主張を相当のところまでできるようになってきた。

5）働くこと・アルバイトの開始とその内容：本人自らがカウンセリングに通うようになった翌年の1月の5回目面接冒頭で，全く自発的に新聞配達（朝刊）を始めたことが明らかになる。朝5時10分に自力で目を覚まし，5時20分から7種類の新聞を72軒配るようになった。雨の日も，雪の日も，間違いなく新聞を配達することの苦労と喜びを，以下のように語っている。

T45　あなたは，夕刊はもう余裕がないね（全然ない）フム，フム。（フム）フム，新聞配達っていうのは，いろんな意味があるけど，どんな意味があると思う？自分で。1つは，まあ，今おっしゃったようなね，授業料など支払いができるわね。

C45　それから，朝のごはんおいしいでしょお（はっはっ）僕はいつもどんぶりで食べてるけどね。（フム，フム）朝が1番おいしい時があるね（フム，フム）前，2年前に学校へ行ってた時は（ハア）朝，起きてからすぐ忙しく行くでしょ。（エエ）そいで，2食目をワッーと口の中に入れてって，（余裕がなかったのね，フム）で，なんか時間がちょっとある時でも食べれなかったでしょ（フム）そやけど（フム　フム，食欲も出るし，気持も）すっきり（すっきりした。フウン，それから，こう何て言うかな）体も《やゝ長い間》なんか自信にもなるね，なんか（言ってたね）ハイ（フム　フム）俺は人と違うことやっている（フム）みんなは勉強だけ，部活動やっている子もおるけど，（フム）まあ社会に出てるって感じがして（ハア，社会とこう出てるって）いつもは（そういう感じが）いつもは，あの配っててね，いろんな家に行けるで（ハア，エエ，フウン）ほんで（お家のようすだとか，こう）そう朝，（フム）おきてみえる家もあるでしょ（ホウ）で（フム）あいさつ（なるほど）して，顔合わせると（フム，「ご苦労さん」言ってくれる）そう（フム，それからまんざらでもないのね）なんだか，いろんな人（ハア）に見てもらってるでしょ（フム，いろんな人が，又こう見守ってくれるからそれに自分もこう答るっていうか）ええ（フウン，社会の人との繋りとか）そいで2年前に学校行っとった時はね，（フム）家と学校の往復だけでしょ。（フム）ほんで，まあ，あの（フム）ちょっとした買い物をスーパーに買いにゆくとか（フム）それ位でね（フム）ほとんど，あの（フム）――《間5″》――（フム）

《　中　　略　》

T48　そう，確かお母さんにそのお話しましたね。私は。フム，他にもそういう例があるからね，知ってるからね（ハアー）それをこう建て直しのきっかけにした人もあるしね。フム，実際今おっしゃったように体を動かして食欲も出るし，気持もいいし，社会とも繋りもあるし，合わせて少しはなにがしかの収入も得られるという意味もある。

C48　それからどういうかなあ（フム）やはり，新聞配達で（フム）あの手ぎわよくやって，そういうこと，まずあるでしょう。（フム）で，あの学校でも（フム）勉強だけやなしに（フム）当番あったり，そういう生活の面で，いろいろ役になったってこともあるでしょ（エエ）そういう場合に，1年生，前の2年前の時にはね（ハイ）勉強だけやったもんやで（フウン）そういうことやりきれとらんもんでね（もどっちゃうし）というか動けなくなっちゃう。フム。

T49　融通がきくね，つまり臨機応変に見通しをもってパッパッとやる。しかも限られた時間の中で（ハイ）後が控えてることだから。そういう手ぎわ良さみたいなこと，身についた。フム，フム，フム，そうか。

C49　それから（フム）なんか，あの《間》（フム）区切りができるってこともある。（ハア，ハア，エエ）その2年前の時にはね。（フム）ずうっと1日（フム）まあ，寝るけどね（フム）寝ることでその日が終ったって，という感じが（フム）してね，（フム）それが今度，新聞配達することによって（ハア）そこで切れて（なるほど，場面がこう変ってゆくわけね，フム　フム）で，あの一《やゝ長い間8″》それほど遠くにでも近く（はい）みとけばいいという。（エエ）

《文中　T……カウンセラー，C……クライエント》

6）進路の選択：本人はカウンセリングの援助によって，ますます自信と勇気をかき立てられ，2年遅れながら，高校2年への復学を決意し，まず現担任と接触をしはじめ，また公民館で高校1年時に学習した主要教科の復習を計画的に行ない，新学期に備えていった。

2年遅れのハンディキャップをもち，復学が認められ約1カ月は自分のペースを守って通学する。そして友だちも通学路が同じとのことで，ひとり親密な同性男子を見い出す。しかし，5月連休明けから，再びプッツリと不登校に陥った。高校教師の地道な配慮にも，応答することなく，また挫折してしまっている。本人は，いまの高校で，あれほどの自信と勇気をみなぎらせていたにもかかわらず，2年間の差を"今様浦島太郎"のように感じているもようである《母親の供述》。しかし相変らず

朝刊配達には，早朝から自力で起床し，ちゃんと配達し終えて帰ってくる，とのことである。　（田　畑）

Ⅲ　考　　察

以上いずれも思春期登校拒否の，いずれも男子症例のみ5例を述べてきたところで，ここでは臨床青年心理学の視点から，以下の3点について，かいつまんで考察することにする。

1. 働くということの内的意味　―「身体」の所有

筆者らが自験した5例は，あるものは新聞配達（3例），看板の塗装・看板上げ（1例），蒲団乾燥業（1例）と多岐にわたっている。いずれも早朝に自力で起床し短時間のうちに数10軒を手ぎわよく数種類配り分けることか，力を要求される作業である点が共通している。

ところで，働くこと・アルバイトということばには，どのような語義があるであろうか。手もとのドイツ語の辞典（木村・相良，1958，43版）には，①（肉体的・精神的）労働；作業；研究，②苦労，骨折り，③（労働の対象・結果：）仕事，課業；労作，製作品，著作，研究の結果，④（麦酒等の）醗酵，⑤〖稀〗労働者〔総員〕とある。つまり身体と精神を集中しての労苦や労作がその意味内容をもち，さらには自己にとってちょうどビールが醗酵するように，馴じみができ，自信や活力が湧き上ってくると考えられる。

登校拒否の子どもたちが初期症状でよく訴えるように身体症状は美事に各部位にあらわれる。本稿の症例Aは自分に異常な気にしかたを体験し，身体になじめなさを感じていた。また秋口に（9月）臀部に湿疹ができ，化膿し，かゆさと痛みに七転八倒した。また9月中旬頃には，右胸下乳の下の奥の方にチカチカ，ピリピリ痛みを訴え，近所の医院で「帯状包疹」と診断され，「もし左胸だったら命が危いところだった」と医者に言われた。症例Bでは，高校の自由奔放な雰囲気がかえって馴染めず，浮き足だってしまった。またラグビーの練習が，かえって（肥満の）身体に耐えられず，息切れしてしまった。症例Cでは，登校拒否特有の頭痛，腹痛，さらには腰痛などを引き起こし，がんじがらめの身体に陥ってしまっている。症例Dでは，身体因としてE. E. Gに"slight abnormal"の異常所見が発見され，身体的器質的異常も備えていた。それが精神的な疲労や学校にも校則が厳しいとか教師や生徒が馴じめない，厳しいとイライラしたり，アクティング・アウト的行動を惹起させる引き金となっていた。また症例Eでは，その完全癖傾向と相俟って，何ごとにも非常に気にし，特に高校での出身地の違いやことばの違いに馴じめなくなっていた。そして絶えず，横隔膜のところがキューッとつり上っている状態であったことを告白している。

思春期症例は，登校拒否をはじめとして，このように自己の「身体」と出会う時期（笠原，1977）であり，わが身体との出会いは，これらの人びとにとって青年期の発達課題の一つにはっきり追加されなければならないと考えられる。また木村（1978）は，精神病理学の立場から思春期における「身体」の問題を論じ，およそ健常者から分裂病者にいたるまで，この問題（「身体」を所有するということ）を明解に論じている。

本稿の5症例も，上記の論者の観点からしても，子ども時代に「何とはなしにもっていた身体」を，思春期に差しかかって，七転八倒して「身体」と出会い，「所有していった」ことを教えてくれているように思われる。そして興味あるのは，これらの症例が登校拒否によって"自己内閉"したり，"籠り"によって自分を再構築していきかける一つの転機に，自己の「身体」を使って，身体を鍛えるかたちで，外に出かけていくようになることである。その結果が，新聞配達であったり，看板塗装であったり，あるいは蒲団乾燥業であったりするところが象徴的である。彼らは一様に，機敏さや力を試されるところを選んでいることに非常に意味があると思われる。

2. "中間地帯"としてのアルバイト先の位置づけ

思春期登校拒否症者にとって，その家庭は家族力動からいっても，決して心理的安定感が充実し，満足のいくものになっていないことは論を待たない。家庭内の父親の存在の薄さや権威のなさに，同一視の対象喪失感があることが5例の中でも共通にみられる（症例A，症例C，症例E）。あるいは家庭内で父親が子育てにおける父親の役割がよくわからず，徒らに子どもに見下げる見方や感じ方でしか接しられなかった症例Dでは，父親の前では小さくなって抑制してしまっていることもみられる。また症例Bのように，炭坑離職とともに転居してきて父親が家庭の経済的困窮に苦しんでおり，晩酌を飲んでは愚痴っぽくガミガミといい，子どもが内的権威として取り入れに苦しんだものもみられる。いずれの症例の場合も，男子がその父親を同一視するには，不完全な父親像であることが伺える。

また母親について言えば，家庭内で，子どもに密着しすぎて，子どもと母親自身との間に，自由な空間がないほどの心理的距離になっている（症例Bの母親は例外）。

このような家庭内の雰囲気のきゅうくつさ，あるいは人間関係に密着状態が生じている状況と併行に，学校内人間関係（特に同性同輩の関係）が未定位であるとき，思春期登校拒否症者は，家庭外，学校外に人間関係の場

を見つけなければならなくなる。ここに“中間地帯”としての働く場，アルバイト先の人間関係の場が存在意義をもってくるものと思われる。

しかし，思春期登校拒否に悩む人びとがすべて，このような場に行き当るとは限らない。他の症例では，相変らず長期にわたって，自宅に蟄居し，“自己内閉”したり，“籠るということ”を徹底して体験しつづけなければならないものもある。数年かかることもあるのである。

また重要なことは，これら“中間地帯”は，思春期登校拒否症者その人が，自発的に，自主的に見い出してくることである。症例Aがこのことを美事に語っているように，自分自身が自分で自分の計画を立て，自分の力で歩もうと取り組む中に，かかるアルバイトも定位づけられてくるのである。また症例Eのように，自分の勉強のためには，（父親のような）“坊ちゃま”でありたくないので，授業料は自分で働いて支払いたくなることである。考えてみれば，このような思春期登校拒否症者は，自分の力で生きることを希求している人のようにも思われる。

ところで，かかる中間地帯としてのアルバイト先の主人をはじめとした人間集団はどのような雰囲気や特徴をもっているのであろうか。まず第1にいえることは，新聞配達にしても，看板の塗装・看板上げにしても，あるいは蒲団乾燥業（さらには左官職）にしても，社会の人びとへのサービス，換言すれば商品や公共出版物を，確実に届けたり，作り上げるという社会的責任を背負った仕事であるということである。しかも身体を動かしてやる仕事であり，みんな身体的に健康であることに長けた人びとの集団であることが考えられる。この点で社会的責任ということを，かかる思春期登校拒否症者は，目で見，かつ体験していくことができると思われる。

第2にいえることは，思春期登校拒否症5例が感じているのは，そのような集団が異質の人間集団であるということであり，「おもしろい」ということである。家庭とはちがった，学校とはちがった年齢，人生経験などの異なる人びとが，他愛もないことを仕事の合間に“雑談”していく。その他愛もない“雑談”が，家庭や学校で見たり聞いたりすること，あるいはＴＶや漫画といった視覚的なチャンネルを通して伝ってくることとは，相当にあるいは全く異って，新鮮に体験できる「おもしろさ」をもっていることが伺えると思われる。このような仕事の合間に垣間みる“おとな”の世界，あるいは“遊び”の世界は，かかる思春期登校拒否症者の，どちらかというと知性化した人びとには，とても有益になる世界として映っているのである。このような世界で，よそのおとな，よその兄さんによって醸し出される雰囲気は，受容的であり，自由なものである。症例Eは，新聞販売店に飼っている雑種犬に会うことも楽しみだと語ったことがある。Eの家では，母親が動物嫌いで，しかめっ面をして毛嫌いするというから，Eが両親と心底から信頼しきれないことをかって述べたことと照らし合わせても，中間地帯への誘意性が浮き彫りにされよう。彼らは，中間地帯を，自己確立のテコにしていると考えられる。

3. 現代家庭教育・学校教育の病弊

本稿でとりあげた5症例は，いずれも1960年代（昭和35年代）以降に誕生したものである。ここでは少し巨視的視点から，そのような時代的背景をなす発症の諸要因との関連で，論を拡大してみたい。

現代の思春期危機の発症の背景をなす諸状況を，大状況，中状況，中心的状況，そして援助的状況の4つに分けて考察してみよう。

1）大状況　①政治経済的要因。1960年代の国際競争での技術革新，高度経済政策から，1970年代の低成長政策，社会福祉政策への転換。国の施策をはじめとして，大，中都市への人口集中，地方の過疎化現象の生起。第三次産業の過当な推進により，親は家庭も顧りみず，猛烈社員化し，旺盛に働き，日曜日はゴロ寝か，ゴルフをかついで野外を走りまわる状況を産み出し，これがブーム化していっていることに象徴されている。

②教育政策　1960年代にピークとなる選別教育，学歴偏重・過剰統制，テスト教育，偏差値による人間の上下の価値づけ，能力主義教育，非人格主義教育の推進，横行。そして1970年代に，“ゆとりある教育”，“生活体験重視教育”が指導要領改訂として手なおしされはじめてきているが，過熱化，受験地獄はまだまだ解消されそうもない。

2）中状況　③学校教師の教育指導態度一般　学校において「急がせる」「詰め込ます」「教え込む」「（できないと）つき離す」そして挙句の果ては「落ちこぼし，切り捨てる」教師の態度の横行。教育とは子どもひとりひとりに「ゆとりある」「触れ合う」「かかわり合う」「ともに喜びあい，感動しあう」ことが，最近ようやく再認識され，重視されてきている。《臨床的接近をしていると，親や子どもの認知を通して，いろんな教師像が浮かび上ってくる。学校カウンセリングの心をわきまえた教師もちょいちょい出くわすことがある。》

3）中心的状況　④家庭の教育・しつけを通して浮かび上ってくる対人関係の基盤。家庭における両親，その他の家族構成員が，どのように協力的協同的かかわりをし，雰囲気を醸成してきているか，家族内人間関係のダイナミックスはどのようであるか，家族がその土地に根づいているか，などは子どもの人格発達と密接な関連が

ある。思春期危機，特に思春期登校拒否の症者の家族をみてみると，先に考察したように両親の役割混乱や歪曲がみられることが多い。

⑤当の本人の性格・パーソナリティの要因　思春期登校拒否症例の本項に関する特質をあげれば，一般に，完全癖傾向が強く，神経質で，身体感覚が過剰なまでに鋭く，生活節制が悪く，極端に知性化した防衛機制をもっていることが伺われる。一寸したことで傷つきやすく，小心であり，図太さに欠けるところが多く見られる。

しかし，思春期登校拒否症者は，前にも述べたように自己確立とか個別化といった人生の大きな岐路に立った時に，実にリアールにその姿をわれわれの前に現わしてくれる。誰が悪いというのでなく，われわれは臨床的出会いを通して，本稿に述べたようにわずか5例であるが彼らが登校拒否という挫折体験をし，悩んでいるそのことを出発点として，本人あるいはその親と取り組んでいく時に，本論文で展開してきたように，かかる人びとにとって，働くこと・アルバイトの意義が，啓発的経験となっていることを明確化しえたことは大きな収穫であると考えている。今後，もっと多くの症例との出会いを通して，さらにわれわれの考えを補正していきたい。

（田畑・伊藤）

文　献

伊藤義美・田畑　治　1980　思春期登校拒否と働くということとの関連について　東海相談学会第12回大会発表

笠原　嘉　1977　青年期―精神病理学から―中公新書

木村　敏　1978　思春期病理における自己と身体　中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」　岩崎学術出版社。189－221頁。

小泉英二他　1972　情緒障害児の治療に関する研究　東京都立教育研究所紀要，**10**，61－124。

光岡征夫　1977　中学生の援助機能　田畑　治・村山正治編「来談者中心療法」（講座心理療法第1巻）福村出版，19－48頁。

田畑　治　1980　臨床心理からみた現代青年像　青年心理学研究会定例会（6月）話題提供　名古屋大学教育学部

田畑　治・伊藤義美・池田博和・江口昇勇・生越達美・間宮正幸　1978　登校拒否・家庭内暴力・働くということ――症例Mを通しての臨床青年心理学的考察　名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科，第**25**巻，131－157。

田畑　治・生越達美・間宮正幸・渡辺直登　1979　臨床青年心理学研究（Ⅲ）――男子症例に関する考察　名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科，第**26**巻，55－75。

（1980年8月31日　受稿）

A STUDY OF ADOLESCENCE IN THE LIGHT OF CLINICAL PSYCHOLOGY (V)

– Adolescent school refusals and the meanings of working for them –

Osamu TABATA and Yoshimi ITOH

It is pointed out that most clients of school refusal in junior or senior high schools begin to work at part-time jobs (Arbeit) in the process of attending school again or social rehabilitations.

In this paper we reported 5 cases of adolescent school refusal, and examined the meanings of working of a part-time job in the light of clinical adolescent psychology.

Case A was a third-grade boy of a junior high school and had not been attending school since in the first grade. Counseling sessions with his mother were held 12 times. He failed in the entrance examination of a senior high school and began to deliver the evening editions of newspapers as a part-time job. Shortly he began to deliver the morning editions of newspapers and to collect bills. In the next year, he entered a private high school, and he is getting along very well now.

Case B, a male student in the first grade of a senior high school, was already temporarily absent from school. He and his father came to ask for a certificate to absent himself from school temporarily. We had consultations with him and his father 2 times at an interval of 6 months. He had decided to withdraw from school temporarily and begun to deliver both the morning and the evening editions of papers. By means of overcoming pains of delivering papers without mistakes, he gained confidence in his own moral energy and bodily strength. Later he returned to school and leads a happy school life everyday.

Case C was a male student in the first grade of a senior high school. His bodily symptoms appeared soon after he entered a technical high school. His school refusal gradually occurred and became worse. Counseling sessions with his mother were held 23 times. As a part-time job he worked in the sign-maker's shop for 5 months. After 2 years later than other students he entered an evening high school and leads a school life vigorously presently.

Case D, 16 years and 11 months old, was a school dropout. We had counseling sessions with him 10 times and his parent or parents 15 times. After leading an idle life for about 6 months, he began to work in the dry cleaner of futon (Japanese bedding). He experienced the severity of his place of work and the acceptive and cooperative human relationships. After that period, he worked as a resident apprenticed plasterer. He tells that he will make a living by an independent plasterer in future.

Case E, a male student in the second grade of a senior high school, was absent from school acutely at the end of the first grade. Counseling sessions with his mother were held 27 times for 13 months. After that time counseling sessions with himself were held 13 times for 4 months. Spontaneously he began to deliver newspapers. He talked about the difficulties and the pleasures of delivering newspapers in the rainy days or in the falling snow days. He began to attend to school after 2 years' absence. However he fell into school refusal in May again. Accordingly the counseling with his mother is presently held again.

The considerations from the view points of clinical adolescent psychology were done upon the following 3 points.

1. The possession of one's body by means of working.

The part-time jobs in which 5 clients were engaged were delivering newspapers (3 cases) and the assistances of the signmaker's shop (1 case) or the dry cleaner of futon (1 case). They awoke themselves early in the morning and, moreover, worked promptly and forcibly without giving up. Their experiences of working facilitated to achieve the adolescent task of encountering and possessing their bodies.

2. The meaning of their places of work as intermediating areas.

The human relationships in their places of work were significant as the intermediating social human relationships between the family life and the school life. Moreover it is remarkable that they found their jobs almost spontaneously by themselves. They utilize the intermediating area as a step of their self-establishment.

3. The pathology of the modern school education and the home education.

The following 5 factors were discussed. 1) Political and economical factors 2) Educational policies 3) Educational guidances and attitudes of teachers 4) The foundations of the interpersonal relationships acquired through home educations and disciplines 5) Clients' characters or personalities

Through the clinical encounters with 5 adolescent cases, we may conclude that part-time jobs have important meanings as developmental experiences for adolescent school refusals, who inevitably encountered on such problems as self-establishment or individuation.

In near future we would like to revise our views through clinical contacts with more adolescent cases.